

発表タイトル	北東アジア安全保障体制の構築 ～欧州安全保障協力会議（CSCE）プロセスからの考察～
大学名	東北公益文科大学
指導教員名	玉井雅隆（たまい まさたか）准教授
学生名	中條紘大（なかじょう ひろと）

プレゼンテーション要旨

現在、中国をはじめとする北東アジア各国の防衛予算は近年上昇傾向にあり、加えてこの地域は日中や韓国と北朝鮮のように偶発的な軍事衝突の危険性も非常に高い。巨大な市場である北東アジアの不安定化は世界経済にとって極めてマイナスな要素であり、この地域の安定化は重要な課題である。今回は欧州安全保障協力会議（Conference on Security and Cooperation in Europe 以下 CSCE）プロセスの事例を参考に北東アジアの安全保障体制をどのように築いていくべきか考察していく。

CSCE で採択された「ヘルシンキ最終議定書」では、欧州における東西陣営間の軍事的な相互不信を緩和するための「信頼醸成措置」が導入された。この措置は軍事演習の参加国への事前通告や軍の移動に関する通告といった内容である。その後のストックホルム軍縮会議での軍事活動・軍事演習へのオブザーバー招待義務付け、軍事活動の年間計画事前通知等の取り決めにより欧州では軍事面における信頼関係が構築され、偶発的な軍事衝突の危険性は極めて低くなった。以上のような欧州の経験を踏まえ、北東アジアでも同様な措置を導入することを提案する。

現在の情勢として北東アジア各国の防衛予算は増加傾向にあり、基本的には相互不信による軍拡が続いていると言わざるを得ない。しかしながら個別的な軍事協力や衝突回避の措置などを見ても、日中間の「日中防衛当局間の海空連絡メカニズム」や米中の「意図せぬ衝突リスクを低減することを目的とした信頼醸成措置についての合意」等があり、偶発的な軍事衝突を回避するためのメカニズムは存在している。しかしながら北東アジアのすべての国を包括するようなメカニズムが存在していないため、この地域にアメリカを加えた多国間の信頼醸成メカニズムを導入すべきだと考える。北東アジアのすべての国と友好関係を築いているモンゴルが中心となりウランバートルで「北東アジア安全保障会議」を開催し、大規模な軍事演習の事前通告、オブザーバーの招待義務付け、軍事活動の年間計画の事前通知義務付けなどの措置を取り入れる。欧州では CSCE を機に東西間の緊張状態は緩和され、米ソの間でタブーであった軍事関係の交渉が可能になった。北東アジアでも信頼醸成措置を導入することで現在の状況に風穴を開け、安定化への第一歩になるのではないだろうか。